

夏季セミナー2015

言語・文化・社会

—国際日本研究の試み—

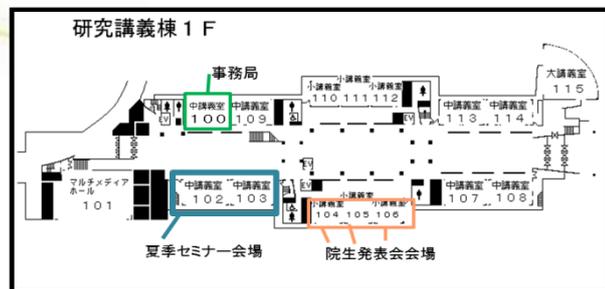
2015年7月14日～17日(火-金) 10:00～17:30

会場：東京外国語大学府中キャンパス
研究講義棟102室、103室

- ◆JR中央線「武蔵境」駅～西武多摩川線「多磨」駅下車徒歩5分
- ◆京王電鉄「飛田給」駅北口-多磨駅行京王バス10分

「サマースクール研究発表会」

7月15・16日(水・木)14:20-17:30 研究講義棟104～106室



東京外国語大学国際日本研究センターは、アジアを中心に日本語・日本研究の第一線で活躍されている研究者を講師にお招きし、世界における国際日本研究の現状を学内で直接学べる機会を提供しています。第4回となる今回も講師とともに海外の大学院生を招聘し、研究発表を通して国内外の院生同士が交流できる場を設けます。言語・文化・歴史・文学・教育などの分野において各国・各地域で進展している日本研究の現在に触れてみませんか。奮ってご参加ください。

Program

7月	14日(火)	15日(水)	16日(木)	17日(金)
10:10-11:40		金鍾徳氏 (韓国外国語大学校) 范淑文氏 (国立台湾大学)	小林幸江氏 (東京外国語大学) 尹鎬淑先生 (サイバー韓国外国語大学校)	蕭幸君氏 (東海大学・台湾) スコット・ヒスロップ氏 (シンガポール国立大学)
12:40-14:10		成田節氏 (東京外国語大学) タサニー・メーター・ヒスイト氏 (タマサート大学)	徐一平氏 (北京外国語大学) 李吉鎔氏 (中央大学校・韓国)	徐翔生氏 (国立政治大学・台湾) 中野敏男氏 (東京外国語大学)
14:20-15:50	ガイダンス	サマースクール 院生研究発表会	サマースクール 院生研究発表会	まとめ 集中講義総評 サマースクール修了式 (～15:20)
16:00-17:30	講義① 春名展生氏 (東京外国語大学)	講義② 野田尚史氏 (国立国語研究所)	サマースクール 院生研究発表会	
18:00		サマースクール 院生研究発表会	サマースクール 院生研究発表会 (大学院生 懇親会)	

<プログラムと概要>

【7月14日(火)】102室	
14:20 15:50	【ガイダンス】 友常勉(東京外国語大学) 夏季セミナー、サマースクールを通しての目標と修得すべきスキルなどを説明する。また、ジャーナルの投稿を視野に入れた論文の書き方、参考文献のまとめ方などもレクチャーする。さらに今回来日した海外の院生に自己紹介をしていただき、国内の院生と交流を図る。
102室	
16:00 17:30	【公開講義】集中講義・歴史 「人口からみる戦後の日本」 著名歴生(東京外国語大学) 現在の日本では、少子化と高齢化が関心を集めています。この授業では、より長期的な視点に立って、社会と人口の関係について考えます。といひますのも、高度経済成長や都市化、あるいは核家族の増加など、戦後の日本を彩った社会の変容には、じつは人口の変動が深く関係しているのです。とりわけベビーブームの発生と、職を求めて地方から都市へと向かったベビーブーム世代の移動が、大きく影響しています。普遍的な人口の動態と重ね合わせることで日本社会の歩みと展望と独特に見る日本の経験も、他の国々と比較しやすくなるでしょう。
103室	
16:00 17:30	【公開講義】集中講義・言語 「日本語教科書はど何が変わり、ど何が変わっていないか?—過去を振り返り、将来の日本語教材を考えるために—」 野田尚史(国立国語研究所) 50年ほど前から現在までの日本語非母語者のためのさまざまな日本語教科書を分析し、どのような部分がどのように変わってきたのか、また、どのような部分が基本的に変わっていないのかを考察する。たとえば、次のようなことです。(1) 日本語教科書の会話文は、状況設定も使われている日本語も自然なものをから自然なものに少しずつ変わってきた。(2) 日本語教科書は、汎用的な目的を持つ総合的なものほかに、学習する技能や学習者を特化したものがあがらず増え続けている。(3) 特にお初級教科書では、文法を重視し文法を中心に構成する形は、長い間、基本的には変わっていない。このように日本語教科書が変わってきた部分と変わらぬ部分を分析することにより、過去を振り返るとともに、日本語教科書はこれからどのように変わっていくかを予想し、将来の日本語教材のあるべき姿について提案を行います。

国際日本研究 東京外国語大学 国際日本研究センター主催

夏季セミナー2015

言語・文化・社会

—国際日本研究の試み—

2015年7月14日~17日(火-金) 10:00~17:30

会場: 東京外国語大学府中キャンパス 研究講義棟102室、103室

◆京中央線「武蔵境」駅〜西武東上線「多磨」駅下車徒歩5分
◆京王電鉄「飛田給」駅北口〜多磨駅行京王バス15分

「サマースクール研究発表会」
7月15-16日(水-木)14:20-17:30 研究講義棟104-106室

【7月15日(水)】102室	
10:10 11:40	10:10~「源氏物語」における囲碁と人間関係の作意 金鍾徳(韓国外国語大学) 中国発祥の囲碁は平安時代の男女の室内娯楽として広く親しまれた遊戯であった。帯木巻に登場する空蟬と軒田頼が対局する場面は源氏の垣間見によって描かれている。また竹河巻では玉鬘の娘大君と中君が碁を打ち対局する場面が描かれている。碁は碁を囲碁と対局する碁将を碁将として碁を打ち、碁の才能を碁将大徳に比喩する。すなわち、「源氏物語」に登場する碁将は単純な娯楽ではなく、碁将を打ち人間関係によって長編物語の作意となる。今回のセミナーでは「源氏物語」の登場人物が碁を打ち対局する場面を中心に、物語における機能と作意を究明してみたい。
12:40 14:10	12:40~「ドイツ語と日本語の受動文」 成田節(東京外国語大学) 主に視点の概念を軸にして、日独語の受動文の基本的な違いを示す。日本語では「被影響」という特徴を持ち、日本語に固有とされるタイプの受動文を、ドイツ語では受動表現の核を占めるwerden-受動文を中心に取り上げる。視点について「視点」と「注視点」の区別を明確に意識することにより、「日本語の固有の受動文は視点に関して能動文と異なるものに対して、ドイツ語のwerden-受動文が注視点に関して能動文と異なる」という違いを明らかにする。その上で、そのような違いがテキストの中で具体的にどのように現れているか、主に小説を題材にして提示する。

【7月15日(水)】102室	
10:55 12:25	10:55~「白秋文学にある台湾描写—台湾への眼差し—」 范淑文(国立台湾大学) 佐藤春夫など台湾訪問の経験のある作家に比べ北原白秋の場合は、台湾訪問関係の文学創作が少ないためであろうか、その台湾訪問記行文学の研究はなかなか限られている。そのうち、台湾研究者陳登の研究はもっとも本格的な論考であり、鋭い指摘がある。確かに、「さうした明るい亜熱帯への原色版風の期待が、何か裏切られたか」を私に感じさせた。「(臺灣紀行)」という、白秋が基隆に着いた時の強烈な描写は印象的である。しかし、果たして「日本の植民地台湾支配」に疑問を抱くことはなかったか」という陳登の鋭い批評ほど白秋が支配者の姿勢で台湾、所謂「本島人」を見ていたのであろうか。本稿では、上記の問題点を意識しながら、それらの紀行文の考察を通して、詩人白秋の台湾への眼差し—を見出し、より客観的な立場で白秋の台湾像にアプローチすることを試みる。
13:25 14:55	13:25~「タイの中級日本語学習者の聴解力についての調査」 タサニー・メーターピット(タマサート大学) 日系企業の増加に伴い、日本語力をもつ人材の採用ニーズが高まっている。職場ではコミュニケーション能力が必要不可欠であることから、最近では日本語能力試験N3の取得が採用の条件となることが多い。そこで、JFLの環境において渡日経験がなくN3を取得した日本語学習者が、生の日本語を聞いた時にその内容をどの程度正確に理解できるかを調査した。調査では、身近なテーマについて、1時間の講演を聴かされた上で、その内容を分担して一人当たり約7分の内容を文字化させ、さらにL1に要約するという課題を課し、その課題遂行過程を観察した。対象者が聴解のなかで未知の語彙に遭遇した時、どのような物的リソースを用い、どのように問題に対処しているかについて考察を行う。

15日(水)		
104室		
14:20 14:50	ローレンス・ニューベリー・ペイトン(東京外大) 日本語・中国語母語話者英語学習者コーパスに基づく前置詞の誤用: 日本語・英語・中国語の空間認知表現の対照研究	
14:50 15:20	陸敏敏(東京外大) 学習者コーパスに基づく日本語母語話者中国語学習者のVOISの習得	
15:20 15:50		
16:00 16:30	張麗斌(東京外大) 取り立ての「も」と「也」の対照研究	
16:30 17:00	サイラス・キビー(国立台湾大) アニメに見られるオノマトペ	
17:00 17:30	嶋原謙一(東京外大) 接触場面における日本語母語話者の意識に英語非母語話者としての経験が与える影響	
17:30 18:00	正本みゆ(東京外大) 日本語教育におけるマンガ活用に向けての基礎研究—日本語学習者によるストーリーマンガの読解分析からの考察—	
105室		
14:20 14:50	徐麗麗(北京大・東京外大) 日本語の日常会話における「女性語」に関する一考察	
14:50 15:20	黄允賢(東京外大) 「山田先生は優しい人だ」構文について—「山田先生は優しい」構文と比較しながら—	
15:20 15:50	橋文嗣(東京外大) 20代日本語母語話者友人同士間「不満表明」に関する考察 —ロールプレイ法の調査結果をもとに—	
16:00 16:30	牛島(筑波大) 誤解の解消における性差についての研究—語用論の観点から—	
16:30 17:00	持田祐美子(韓国中央大) 日韓の謝罪文化の違い—日本人観光客の「不満」の内容から—	
17:00 17:30	孫揚(中国揚州大・東京外大) 緊急依頼におけるボライトネス—日本語母語話者と中国人日本語学習者に 対するrole-playing調査に基づいて—	
17:30 18:00	廣瀬蘭(開南大) 日中両言語における対照研究—「ノドハナイカ」を中心に—	
106室		
14:20 14:50	モンコンチャイ・アックラチャイ(東京外大) 日本語とタイ語の限定表現に関する対照研究 —「名詞+だけ」が用いられた文を中心に—	
14:50 15:20	蔡建華(北京外大) 「二字漢語」とその対応する「二字漢語をする」との交錯条件—意味からのアプローチ—	
15:20 15:50	金重珍(東京外大) 日韓IV+N ₁ 型複合名詞の語構成に関する対照研究	
16:00 16:30	孫淵月(東京外大) 品詞間の連続性について—名詞から連体詞へ—	
16:30 17:00	城戸秀則(国立政治大) 段階性に到達動詞を持つ絶対的成立点と相対的成立点	
17:00 17:30	崔正熙(東京外大) 日本語と韓国語の名詞述語文に関する対照研究	
17:30 18:00	カーヴェ・マグスティ(東京外大) 日本人ペルシア語学習者の作文におけるペルシア語の前置詞の誤用 —日本語や英語との対照—	

【7月16日(木)】102室	
10:10 11:40	10:10~「年少者に対する日本語教育—JSL対話型日本語能力測定法DLAの活用—」 小林幸江(東京外国語大学) 2014年4月1日より「学校教育法施行規則」の一部改正に伴い、全国の小中学校で「特別の教育課程」として日本語が教えられることになった。そこでは、初期の日本語指導に加え、教科学習についているための日本語力(Academic Language Proficiency) (以下、ALP)の育成が指導の大きな柱となる。発達の途中にある年少者にとりALPは欠かせない言語能力である。その力を測定・評価し学習につなげるものとして、2013年に「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA」(以下、DLA)が開発された。特別教育課程に日本語教育が組み込まれたことにより、今後DLAは年少者の日本語教育に必須のものとなってまいらさう。そこで、本講義では主に小学校、中学校を中心に、学校教育の中の年少者に対する日本語教育の現状、年少者の日本語習得とDLA、年少者の日本語能力の評価の3点について述べる。
12:40 14:10	12:40~「日本語の名詞が量語の形で擬態的な意味を表す問題について—コーパスの役割も同時に考える—」 徐一平(北京外国語大学) 日本語の名詞には「子供供した小動物」や「田舎田舎した部落」といったような形式で使われる現象がある。このように使われた場合には、「何にも何々らしい様子をしている」というような擬態的な意味が発生する。しかし、どのような名詞にはこのような使われ方ができるのか、どうしてこのような現象が現れたのかなどの問題については明らかにされていない。本講義は、コーパスから検索されたデータを利用してこの問題を明らかにすると同時に、コーパス研究の役割、特にあまり一般的ではないが、しかし研究する価値のある言語現象を究明するときの役割についても論じてみる。

【7月16日(木)】102室	
10:55 12:25	10:55~「e-learning教育における日本語の習得研究—自律学習を中心として—」 尹鎮淑(サイバー韓国外国語大学) 日本語教育パラダイムが変化している中、日本語学習者の効果的かつ効率的な日本語教育に役立つ方法としてe-learningの導入の必要性が唱えられるようになり、これに学習効果に関する研究が必要となってきている。e-learningの発展のためには、学習コンテンツや教育方式等がe-learningに最適化され、従来の教室での学習と同等の学習効果が得られるコンテンツを開発し実践していく必要があるが、その際に最も重要視されるのが、学習者がいかにして学ぶかという第二言語習得研究である。さらに、e-learningにおける第二言語習得として、従来の教授者中心の教育に留まらない学習者の自律性を重視した学習方法が求められる。本発表では、e-learningにおける第二言語としての日本語の習得法を検討し、e-learning日本語教育の自律学習の有効性を探る。
13:25 14:55	13:25~「社会言語学からみた現代韓国社会の構築」 李吉謙(韓国中央天学校) 「知るだけでは不十分、知の活用が必要である。意志だけでは不十分、実行が必要である。」ゲーテのことばである。社会が大学(または学問の成果)に期待するところは、学知の社会への還元・実装であろう。社会言語学は、その目標の一つとして、「社会問題の解決へのことばの面からのアプローチ」ということをあげているので、ゲーテのことばと親和性が高い。本講義では、まず、社会言語学の目的および中心テーマを簡略に紹介し、次に、自身の行っている研究を、特に臨床性に焦点を当てて紹介する。その後、研究と社会活動のつながりについて、(1)民主化のための全国大学教授協議会活動、(2)多文化子ども人権教育プログラムの実施、を紹介する。最後に、社会言語学からみた現代韓国社会の構築について、次の3点に焦点を当てて分析する。(a)韓国の対日意識は、社会支配層の「親日コンプレックス」による現代韓国社会の構造的な問題である。(b)「見せかけの民族主義」によりウチでは「好日」、ソトでは「嫌日」という心理的両面性が形成されている。(c)「빨리빨리(빨리, 急げ)の文化」家族利己主義・整形大国」という現代韓国の社会文化的現象は、公共性の崩壊により「私利私欲」に頼るを得なくなった結果である。

15日(水)		
104室		
14:20 14:50	張曉明(北京外大) 山鹿素行思想における孟子王覇論の変容について—朱子学との軌跡を手がかりに—	
14:50 15:20	解放(東京外大) 安部公房の『他人の顔』論—語り手の機能による構造の打破をめぐる—	
15:20 15:50	高好真(東京外大) 三島由紀夫における「生の肯定」としてのヘリズム— 『金閣寺』『鏡子の家』『豊饒の海』を中心に—	
16:00 16:30	張雅蒞(国立台湾大) 『宮尾本平家物語』における平時子像の研究—『平家物語』における 二位の尼との比較を中心として—	
16:30 17:00	金兌映(韓国外大) 『源氏物語』における薫の主人公性に関する考察—女一宮と女二宮との関係を中心に—	
17:00 17:30	孫彦玉(韓国外大) 『源氏物語』における飲食研究—若菜巻を中心に—	
17:45 19:45	院生懇話会@円形食堂 (参加費 学生: 1000円 教職員: 3000円)	
105室		
14:20 14:50	那須理香(国際基督教大) スウェーデン・ボルグの神秘主義思想と鈴木大拙の禅思想 —スウェーデン・ボルグ思想は 鈴木大拙の「靈性」概念形成に関わりがあったか—	
14:50 15:20	簡孝羽(国立政治大) 明治期における牛肉食用化の具体相—飯名壺魯文『安愚楽録』を中心に—	
15:20 15:50	乘昕怡(東京外大) 日本と中国におけるジェントリフィケーションに対する考察	
16:00 16:30	黄楚群(東京外大) 米穀法時代の米価調節論—米穀調査会における議論を中心に—	
16:30 17:00	内川隆文(東京外大) 1930年代日本における統制経済を巡る言説空間の展開—電力国家管理を中心に—	
17:00 17:30	レプロワ・マリヤ(東京外大) ロシア内戦の難民: アメリカ赤十字社と日本の関わりについて	
106室		
14:20 14:50	イム・ジイン(東京外大) 日韓の土着信仰とキリスト教思想の様相の比較研究	
14:50 15:20	曾錦方(台湾東海大) 日本統治期の台湾における「少女」像の構築とその自己形成—楊千鶴「花咲季節」を例として—	
15:20 15:50	クリッタボフ・ヴィーバー・ヴィークン(タマサート大) 日本の書籍出版産業の多様性: 構造、流通制度、企業関係性から考察する	
16:00 16:30	鄭永寿(東京外大) 在日朝鮮人にとつての「8.15」—関東大震災時の虐殺事件のトラウマ的体験とそのゆくえ	
16:30 17:00	高洋(シンガポール国立大) 19世紀末から20世紀初頭の西洋における女優貞娘と花子の上演の受容について	
17:00 17:30	木下佳奈(東京外大) 本省人作家・黄春明の台湾社会に対する認識—日本統治期の余波と国際情勢・近代化の 影響を中心に—	

【7月17日(金)】102室	
10:10 11:40	10:10~「耽美という名を背負って—葉石濤「春怨」を読む」 蕭幸君(台湾東海大学) 日本植民地時代に生まれた台湾作家葉石濤の「春怨」は長い間、耽美という名のもとで読まれてきた。そのため、葉石濤自身がその著作『台湾文学史』において、台湾社会の関心の薄さで自己批判さえも行っている。しかし、このような葉石濤の自己批判の背後には、戦後の台湾における日本語世界の著作に課された枷があることは言うまでもない。また、「春怨」を仔細に読んでみると、作者が台湾に向けた眼差しは必ずしも欠如しているとはいえない。本発表は、「春怨」における台湾社会への関心があるかというよりも、この作品が「耽美」というレッテルが貼られたために狭められてきた読み方、改めて問うてみたい。
12:40 14:10	12:40~「日本人の死生観と死後の世界観」 徐翔生(国立政治大学) 死生観は国や民族によって異なるものである。死後の世界観も宗教によってまた様々である。周知のように、日本人は古くから死の問題に関心があり、死を美化することすらあった。このような日本人の死生観と死後の世界観はどのようにしてあらわれ、定着していったのであろうか。本報告では、まず古代から現代までの文芸作品を例として、その中に描かれた死の思想を探りながら、日本人の死生観の具体相を明らかにしたい。次に日本人の死後の世界観に如何なる宗教の要素がみられ、それが日本人の死生観にどのような影響を与えたのかについて論じたい。最後に宗教の人間観・世界観と比較し、日本人の死に対する独自の見方について議論したい。本報告によって日本人の死生観と世界観の解明、及び日本の思想文化研究に少しでも貢献することができれば幸いです。
14:30 17:30	14:30~ まとめ、集中講義総評、サマースクール修了式

【7月17日(金)】102室	
10:55 12:25	10:55~「一茶と季語」 スコット・ヒスロップ(シンガポール国立大学) 小林一茶は俳人として有名で、海外でもかなり人気がある。しかし学者達はしばしばその季語の使い方から批判する。確かに芭蕉や蕨村の優れた発句に比べれば、一茶は一瞥して季語を大事にしなかったに見える。今回の発表は一茶の「雪」と「雁」を含める発句を取り上げて、一茶の季語概念を追究しようとする。一茶の季語の使い方は乱雑ではなく、一種の詩的なロジックがあると思われる。たとえば「雪国出身の一茶」には「雪」が伝統由来の優雅な抽象概念というより、むしろ一種の危機感が込められた具体的な「雪」であった。一方一茶の「雁」の発句を正確に理解するために東アジアにおける「雁」についての伝統的な概念をまず掌握する必要があると思われる。
13:25 14:55	13:25~「詩歌から震災後の時代を考える—近代日本のもう一つの震災後」 中野敏男(東京外国語大学) 東日本大震災から四年余りが過ぎて、あらためて震災後の時代と社会を考えようとするとき、近代日本が経験したもう一つの大震災である「関東大震災」とその時代の重要な参照項になるというは明らかだろう。そこで本報告が目指したいのは、かの関東大震災後という状況下で「詩歌」がもつた精神史上の意味についてである。東日本大震災下であらゆるメディアが震災情報だけに集中したとき、それでも巷にわずかに流れていたのは傷ついた心を癒すはずの詩や歌であった。それに気づいて振り返ると、関東大震災のあった1920年代もまた、新しい童謡や民謡や詩の生まれた「詩歌の時代」であったのだ。しかもこの時代に生まれた「心優しい詩や歌」は、つぎの30年代である戦争の時代には「狂々しい軍歌や愛国詩」に系統的につながっていく。それはどうして可能だったのだろうか。報告では、かの時代の詩歌の営みに内在于して、その「道」を考えたい。